

# 臨床看護学・助産学専攻科

## 1 構 成 員

|                          | 平成 24 年 3 月 31 日現在 |       |
|--------------------------|--------------------|-------|
| 教授                       | 1 人                |       |
| 准教授                      | 3 人                |       |
| 講師（うち病院籍）                | 5 人                | (0 人) |
| 助教（うち病院籍）                | 8 人                | (0 人) |
| 助手（うち病院籍）                | 0 人                | (0 人) |
| 特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む） | 1 人                |       |
| 医員                       | 0 人                |       |
| 研修医                      | 0 人                |       |
| 特任研究員                    | 0 人                |       |
| 大学院学生（うち他講座から）           | 17 人               | (0 人) |
| 研究生                      | 0 人                |       |
| 外国人客員研究員                 | 0 人                |       |
| 技術職員（教務職員を含む）            | 1 人                |       |
| その他（技術補佐員等）              | 2 人                |       |
| 合計                       | 38 人               |       |

## 2 教員の異動状況

|              |  |
|--------------|--|
| 野澤 明子（教授）    | （H9.4.1 採用、H13.8.1～現職）                     |
| 大見サキエ（教授）    | （H16.4.1～H17.3.31 助教授；H17.4.1～H23.8.31 退職） |
| 永井 道子（准教授）   | （H16.10.1～20.7.31 講師；H20.8.1 から現職）         |
| 久保田君枝（准教授）   | （H17.4.1～現職）                               |
| 佐藤 直美（准教授）   | （H9.8.1～18.3.31 助手、H18.4.1～講師、H23.10.1～現職） |
| 宮城島恭子（講師）    | （H14.1.1～H17.3.31 助手；H17.4.1～現職）           |
| 安田 孝子（講師）    | （H16.4.1～現職）                               |
| 倉田 貞美（講師）    | （H18.6.1～現職）                               |
| 中川 理恵（講師）    | （H21.4.1 採用、現職）                            |
| 武田 江里子（講師）   | （H21.4.1～現職）                               |
| 杉山 琴美（助教）    | （H16.4.1～19.3.31 助手；H19.4.1～現職）            |
| 足立 智美（助教）    | （H19.4.1～現職）                               |
| 牧野 公美子（助教）   | （H18.4.1～19.3.31 助手；H19.4.1～現職）            |
| 坪見 利香（助教）    | （H19.4.1～現職）                               |
| 五十公野 由起子（助教） | （H18.5.1～H19.3.31 助手；H19.4.1～H24.3.31）     |
| 河島 光代（助教）    | （H21.11.1 採用、現職）                           |
| 田坂 満恵（助教）    | （H22.4.1～現職）                               |
| 廣岡 亜美（助教）    | （H22.7.1～現職）                               |

佐藤 裕紀 (助教) (H22.10.8 採用、H23.1.11～現職、H23.9.30 退職)

羽持 寛子 (特任助教) (H23.4.1～現職)

村上 静子 (教務補佐員) (H21.4.1～現職)

### 3 研究業績

数字は小数2位まで。

|                     | 平成23年度 |       |
|---------------------|--------|-------|
| (1) 原著論文数 (うち邦文のもの) | 2 編    | (2 編) |
| そのインパクトファクターの合計     | 0.00   |       |
| (2) 論文形式のプロシーディングズ数 | 5 編    |       |
| (3) 総説数 (うち邦文のもの)   | 3 編    | (1 編) |
| そのインパクトファクターの合計     | 4.87   |       |
| (4) 著書数 (うち邦文のもの)   | 2 編    | (2 編) |
| (5) 症例報告数 (うち邦文のもの) | 0 編    | (0 編) |
| そのインパクトファクターの合計     | 0.00   |       |
| (6) その他 (レター等)      | 1 編    |       |
| そのインパクトファクターの合計     | 0.00   |       |

#### (1) 原著論文 (当該教室所属の者に下線)

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 倉田貞美、山下ひろみ：胃瘦栄養を代理決定した家族介護者による在宅介護の体験、  
老年看護学、16(1), 48-56, 2011

インパクトファクターの小計 [ 0.00 ]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 盛山幸子、島田三恵子、足立智美、産後の夫婦関係及び出産満足度と「胎児感情及び母親役割  
行動」との関連、家族看護学研究(17)1,13-19,2011.

インパクトファクターの小計 [ 0.00 ]

#### (2) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 大見サキエ、山本恵美子、牧野公美子、宮城島恭子、木山幹恵、加藤和子：医療安全教育に関する取り組みの現状と看護職のニーズ-講演会とシンポジウムを開催して-。第15回一般社団法人日本看護研究学会 東海地方会学術集会 示説発表用ポスター集、12-13, 2011.
2. 武田江里子、小林康江、加藤千晶、母親の子どもに対する「愛着-養育バランス」尺度の開発 第1報-母親から子どもへの「愛着」「養育」の構成因子の抽出-、日本看護科学会誌、32 巻1号、30-39、2012

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 長山有香理、白尾久美子、野澤明子：集中治療室へ配置転換した看護師が直面する困難。日本看護研究学会雑誌，34(1)，149-159，2011.
2. 鳥居千恵、倉田貞美：認知症の患者本人が主たる家族介護者との新たな関係性を構築していくプロセス、老年看護学、16 卷 1 号：57 - 65、2011
3. 大見サキエ（天理医療大学）、河野由美（幾中央大学）、酒井郁子（千葉大学）、河津芳子（埼玉県立大学）、城生弘美（東海大学）、岡光京子（県立広島大学）、谷口好美（金沢大学）、新谷恵子（新潟医療福祉大学）、中村鈴子（活水女子大学）、坪見利香：看護系大学における教養教育のありかたに関する研究—教養教育に関する教員の認識—，日本看護学教育学会誌，21（3），59-61,2012.3.

### （3）総 説

#### A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Sato N, Sato T, Nozawa A, Sugimura H. Assessment scales for nicotine addiction. J Addict Res Ther S1:008. doi:10.4172/2155-6105.S1-008, 2012.
2. 久保田君枝 妊婦の栄養調査からみた妊婦栄養の実情 臨床栄養 Vol.119 No2.2011-8  
インパクトファクターの小計 [1.13]

#### B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. Sugimura H, Tao H, Suzuki M, Mori H, Tsuboi M, Matsuura S, Goto M, Shinmura K, Ozawa T, Tanioka F, Sato N, Matsushima Y, Kageyama S, Funai K, Chou PH, Matsuda T: Genetic susceptibility to lung cancer. Front Biosci (Schol Ed), 3: 1463-1477, 2011.  
インパクトファクターの小計 [3.74]

### （4）著 書

#### A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 武田江里子：第5章ハイリスク新生児の病態とそのケア、3. 分娩損傷：助産師基礎教育テキスト第7巻（遠藤俊子編集）、p220 -223、日本看護協会出版会、2012

#### B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. 尾島俊之、倉田貞美：保健指導ノート2012、日本家族計画協会、高齢者保健福祉、東京10-1-10-12、2011

- 尾島俊之, 安田孝子: 保健指導ノート 2012、日本家族計画協会、血圧の状況、肥満とやせの状況、喫煙の状況、アルコール関連、思春期の喫煙と飲酒、がん対策、糖尿病、東京、5-9-5-21、6-6-6-12、2011.

#### (6) その他 (レター等)

- 倉田貞美、日本と米国の老年医学会における身体拘束に関する論文の比較、日本老年医学会雑誌、48 巻、712、2011

インパクトファクターの小計 [ 0.00 ]

### 4 特許等の出願状況

|               | 平成 23 年度 |
|---------------|----------|
| 特許取得数 (出願中含む) | 0 件      |

### 5 医学研究費取得状況

|                     | 平成 23 年度 |          |
|---------------------|----------|----------|
| (1) 文部科学省科学研究費      | 10 件     | (937 万円) |
| (2) 厚生労働科学研究費       | 0 件      | ( 0 万円)  |
| (3) 他政府機関による研究助成    | 0 件      | ( 0 万円)  |
| (4) 財団助成金           | 0 件      | ( 0 万円)  |
| (5) 受託研究または共同研究     | 1 件      | ( 30 万円) |
| (6) 奨学寄附金その他 (民間より) | 0 件      | ( 0 万円)  |

#### (1) 文部科学省科学研究費

- 野澤明子 (代表者)、佐藤直美、中川理恵 (分担者) 基盤研究 (C) 糖尿病性腎症患者が抱える問題状況を環境要因の構造からアプローチする取り組みの検討 40万円 (新規)
- 佐藤直美 (代表者) 若手研究 (B) 外来化学療法を受ける進行がん患者の適応に至るプロセス 50万円 (継続)
- 五十公野由起子 (代表者) 若手研究 (B) 救急外来におけるDV被害当事者への看護実践モデルの考案 831,506円 (継続)
- 宮城島恭子 (代表者) 若手 (B) 小児がん患者と周囲の人との疾患に関するコミュニケーションを支えるための基礎的研究 70万円 (継続)
- 大見サキエ (代表者) 基盤 (C) がんの子どもへの教育支援プログラムと連携システムに関する基礎的研究 491,692円 (継続)
- 久保田君枝 (代表者) 基盤研究C、低出生体重児の増加および体重増加に及ぼす妊婦の栄養状態に関する縦断的研究208万円 (新規)
- 武田江里子 挑戦的萌芽研究、母親の養育者としての発達に関する研究―「愛着-養育バランス」尺度の活用―、190万円 (新規)
- 足立智美 (代表者) 若手研究(B) 妊婦の姿勢とマイナートラブル・産科異常との関連 65万円 (継続)

9. 杉山琴美（代表者） 若手研究（B）多胎妊娠を告げられた女性の看護実践モデルの構築 117万円（新規）
10. 牧野公美子（代表者） 若手研究（B） 認知症高齢者のエンドオブライフ・ケア充実に向けた家族ケア実践能力育成に関する検討 65万円（継続）

(5) 受託研究または共同研究

1. 久保田君枝（代表者）産学連携臨床研究 乳児における斜頭症・絶壁頭の防止用具の開発 — 試作品の効果検証— 30万円（継続）

## 7 学会活動

|                 | 国際学会 | 国内学会 |
|-----------------|------|------|
| (1) 特別講演・招待講演回数 | 0件   | 0件   |
| (2) シンポジウム発表数   | 0件   | 1件   |
| (3) 学会座長回数      | 0件   | 2件   |
| (4) 学会開催回数      | 0件   | 0件   |
| (5) 学会役員等回数     | 0件   | 9件   |
| (6) 一般演題発表数     | 2件   |      |

(1) 国際学会等開催・参加

5) 一般発表

ポスター発表

1. Suzuki M, Kurata S, Makino K, Yamamoto E, Kanamari M, : Effect of Behavioral Factors and Symptoms of Cognitive Impairment on Risk Factors for Falls among Elderly in a Geriatric Facility in Japan, Gerontology & Geriatric 2011 Ninth Asia/Oceania regional congress of Gerontology & Geriatric, p.240-241,2011
2. Eriko Takeda : Difference of consciousness of breastfeeding Comparison according to mother's age 、 ICM 29<sup>TH</sup> TRIENNIAL CONGRESS、22/06/2011、Durban, South Africa.

(2) 国内学会の開催・参加

3) シンポジウム発表

1. 大見サキエ：第15回日本育療学会学術集会 シンポジウム「入院している子どものQOL向上のための連携支援」

4) 座長をした学会名

野澤明子、第5回日本慢性看護学会、2011年6月、岐阜  
大見サキエ 第15回日本育療学会学術集会

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

野澤明子 日本慢性看護学会評議員  
 中川理恵 日本糖尿病教育・看護学会 専任査読員  
 大見サキエ 日本小児看護学会 評議委員 専任査読委員  
 大見サキエ 日本看護学教育学会 評議委員  
 大見サキエ 日本看護医療学会 専任査読委員  
 大見サキエ せいれい看護学会 評議委員  
 久保田君枝 日本母性衛生学会 理事  
 久保田君枝 日本看護医療学会 査読委員  
 久保田君枝 静岡県母性衛生学会 理事

## 8 学術雑誌の編集への貢献

|                   | 国内 | 外国 |
|-------------------|----|----|
| 学術雑誌編集数（レフリー数は除く） | 0件 | 0件 |

## 9 共同研究の実施状況

|            | 平成23年度 |
|------------|--------|
| (1) 国際共同研究 | 0件     |
| (2) 国内共同研究 | 7件     |
| (3) 学内共同研究 | 0件     |

### (2) 国内共同研究

松尾ひとみ（福岡大学）、中川理恵、遠藤久美（静岡県立静岡がんセンター）：自家組織による乳房再建術を経験する乳癌患者への看護の可能性の探究

佐藤直美、相村春彦（腫瘍病理学）、谷岡書彦（磐田市立総合病院検査科） 喫煙行動と遺伝子多型の関連

倉田貞美、牧野公美子、村上静子 梅林ゆきゑ（浜松北病院）、芥川知奈（浜松北病院）：一般病院に入院する高齢者への不必要な身体拘束を解除する看護モデルの構築

鈴木みずえ、牧野公美子、菊地慶子、木本明恵（日本スウェーデン福祉研究所）、中込敏寛（日本スウェーデン福祉研究所）：タクティールケア認定取得者アンケート調査における“触れるケア”の効果と意義の検討

鈴木みずえ、牧野公美子、菊地慶子、木本明恵（日本スウェーデン福祉研究所）、林辰弥（三重県立看護大学）：家族介護者に対するソフトマッサージの有効性

大見サキエ、宮城島恭子、坪見利香、岡田周一（小児科学講座）、河合洋子（宝塚大学）、金城やす子（名桜大学）、濱中喜代（東京慈恵医科大学）、高橋由美子、加藤千明：がんの子どもの教育支援プログラムと連携システムに関する基礎的研究

大見サキエ、高橋由美子、石田寿子（天理医療大学）、坪見利香、宮城島恭子、佐鹿孝子、久保恭子、坂口由紀子（埼玉医科大学）：学生が子どもの立場に立った看護が実践できるようになるプロセスの妥当性の検討

## 10 産学共同研究

|        |          |
|--------|----------|
|        | 平成 23 年度 |
| 産学共同研究 | 1 件      |

1. 久保田君枝（代表者）産学連携臨床研究 乳児における斜頭症・絶壁頭の防止用具の開発  
—試作品の効果検証—

本研究は、企業との共同研究により、児頭の変形を予防するための臥床時の接触圧を軽減する寝具を開発し、その効果と安全性を検証することを目的とするが、今回はその第一次調査として試作品の体圧分散と減圧の効果、睡眠に伴う快適性と安全性について検証する。

(久保田君枝 田坂満恵 足立智美 児島佳子 羽持寛子)

## 11 受賞

- (3) 国内での授賞

倉田貞美、日本認知症ケア学会平成 23 年度石崎賞、2011 年 9 月 25 日

## 12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 急性心筋梗塞患者の家族員への看護の探究

以前より、急性心筋梗塞患者の家族員における病いの経験を、現象学の思考をもとにつまびらかにし、看護実践の可能性を探究している。平成 23 年度は、急性心筋梗塞を患い低心機能となった患者の配偶者（妻）の経験の営まれ方を明らかにし、成果をまとめ、投稿にむけての準備を行った。

(中川理恵)

2. 自家組織による乳房再建術を経験する乳癌患者への看護の可能性の探究

文献検討より、乳房再建術は患者にとって有益な方法の一つではあるが、普及の段階にあることから、医療者によるケアが患者の状況と一致していない側面がみられ、ケアの開発が今後の課題と考えられた。そこで、これまで、ある看護理論をもとに、乳房再建術を経験する乳癌患者へのケアを探究してきた。平成 23 年度は、その成果をまとめ、投稿にむけての準備を行った。

(松尾ひとみ<sup>1</sup>、中川理恵、遠藤久美<sup>2</sup>)<sup>1</sup>福岡大学、<sup>2</sup>静岡県立静岡がんセンター

3. 外来化学療法を受ける進行がん患者の適応に至るプロセス

外来で化学療法を受ける進行がん患者が治療をどのように生活に組み込み、適応していくかを質的研究手法を用いて明らかにすることを目的とした研究である。データ収集を行い、解析中であるが、対象者数を増やし継続していく。

(佐藤直美、野澤明子、中川理恵)

4. 糖尿病性腎症患者の血液透析療法導入に至るまでの心理的特徴

透析導入期にある糖尿病性腎症患者が抱える問題と心理的特徴を明らかにする目的で、半構造化インタビューを実施し、個別分析をすすめている。透析を導入する前に出現した身体症状の辛い経験、糖尿病に対する思いや今後を含めた病気の管理に対する気持ち、仕事や家族への思いや周囲の

反応、今後の透析治療の進歩に対する期待感などの特徴が得られた。今後も対象者数をふやし、分析をすすめていく。

(野澤明子、佐藤直美、中川理恵、石川敬子<sup>1</sup>) 1附属病院看護部

#### 5. 高齢者における DBH rs5320 遺伝子多型と喫煙行動との関連

60歳以上の2521名の外来患者を対象に dopamine beta hydroxylase rs5320 遺伝子多型と喫煙行動との関連を検討した。一日喫煙本数とニコチン依存度テスト FTND において関連が見られ、投稿を行った。

(Ella<sup>1</sup>, 佐藤直美<sup>1</sup>, 西澤大輔<sup>2</sup>, 影山信二<sup>1</sup>, 山田和孝<sup>1</sup>, 倉部誠也<sup>1</sup>, 石野佳子<sup>1</sup>, 陶弘<sup>1</sup>, 谷岡書彦<sup>3</sup>, 野澤明子, Chen Renyin<sup>1</sup>, 新村和也<sup>1</sup>, 池田和孝<sup>2</sup>, 梶村春彦<sup>1</sup>) 1腫瘍病理学 2東京都医学総合研究所, 3磐田市立総合病院検査科

#### 6. 多胎児を妊娠した女性の妊娠継続に関する意思決定過程

多胎児を妊娠した女性の妊娠発覚時の意思決定プロセスとその影響要因を明らかにすることを目的に半構成面接による調査を実施した。現在、修正版グランデッド・セオリー・アプローチの手順に従ってデータの分析中である。

(杉山琴美)

#### 7. 救急外来における DV 被害当事者への看護実践モデルの考案

DV 被害当事者の支援に携わる支援者へのインタビュー調査を行い、その分析を行った。支援者は DV 被害当事者の心理的葛藤や社会的背景を考慮しながら、共感する態度で接し、DV 被害当事者が今後の生き方を自分自身で決められるよう自己決定を促すかわりを行っていた。その中で、DV 被害当事者に対応する支援者にも心理的負担があることが語られ、支援者同士で語り合う場を持ち、支援者同士の情報共有やサポートの必要性があることが示唆された。DV 被害当事者への対応は加害者からの接触等の不足の事態に備え、複数で関わり DV 被害当事者の安全に配慮されていた。

(五十公野由紀子)

#### 8. 脳卒中患者が排泄援助場面を通じて体験する「病い」の意味

進行性脳卒中の中でも Branch atheromatous disease(BAD)は、ラクナ症候群を呈するが、治療抵抗性で機能予後が不良な場合が多く、運動麻痺という身体障害を抱える患者の苦悩は非常に大きい。この研究の目的は、援助場面での具体的な経験の語りから、患者が経験する世界を探り、その体験から「病い」の意味を明らかにし、主観的体験を構造化することを目的とした研究である。データ収集、質的解析中で、今後も併行していく予定である。

(河島光代)

#### 9. 一般病院に入院する高齢者への不必要な身体拘束を解除する看護モデルの構築

身体拘束は深刻な廃用性の機能障害を生むばかりか、尊厳を著しく脅かす人権侵害行為と認識されている。多くの医療処置が実施されている一般病院では、医療処置を安全に遂行し生命を守るた

めに、身体拘束以外にどのように看護対応すればよいのかが確立していない。そのため、弊害や人権侵害であると思いつつも、身体拘束をせざるを得ない現実に苦しむ看護師は多く、一般病院における不必要な身体拘束を防止する具体的な対応策の確立が強く望まれ、看護上の差し迫った課題となっている。

そこで、A病院の看護部との共同研究として、パーソンセンタードケアの研修会、認知症高齢者との超コミュニケーション法：バリデーションの研修会を計6回、ワークショップを2回、身体拘束を実施している事例についてパーソンセンタードケア等の視点から検討会を計6回開催してきた。本年度は更に困難事例について4回の検討会を実施した。また、研修会前後における身体拘束減少効果と看護師の認識変化について調査し、有意な変化を確認した。現在、看護師の認識がどのように変化していったのか、その詳細なプロセスを明らかにする調査が進行中である。

(倉田貞美、牧野公美子、村上静子)

#### 10. 認知症高齢者のエンドオブライフ・ケア充実に向けた家族ケア実践能力育成に関する検討

本研究は、認知症高齢者のエンドオブライフ・ケア充実に向けた、入所高齢者の家族に対する看護師のケア実践能力育成に関する基礎的資料を得るために、家族と看護師の認識および看護師の家族ケア実施状況等を把握することを目的とした。中部地方にある100ヶ所の介護老人保健施設の調査協力を得て質問紙調査を実施し、家族594名、看護師647名から回答を得た。今後、研究成果を発表していく予定である。

(牧野公美子、倉田貞美)

#### 11. タクティールケア実践者のケア意識の因子構造とその関連要因

タクティールケアはスウェーデンで開発されたタッチとマッサージの中間的な位置づけにあるケア手法であり、現在、わが国でも認知症ケアに取り入れられている。本調査では、タクティールケアIコース認定取得者476名を対象に郵送による無記名自記式質問紙調査を実施し、タクティールケアに関する意識の因子構造と関連要因を明らかにした。現在、研究成果を学会誌に投稿中である。

(牧野公美子、鈴木みずえ、菊地慶子、木本明恵、中込敏寛)

#### 12. 小児がん患者と周囲の人との疾患に関するコミュニケーションを支えるための基礎的研究

青年期の小児がん経験者を対象に、病気を抱える自己に向き合う過程と、疾患に関する周囲の人とのコミュニケーション等の影響要因を明らかにするために、半構成的面接を実施した。今後も引き続き、データ収集・分析を進めていく。

(宮城島恭子、大見サキエ)

#### 13. 学生が子どもの立場に立った看護が実践できるようになるプロセスの妥当性の検討

高橋ら(2010)が面接結果から明らかにした、学生が子どもの立場に立った看護が実践できるようになるプロセスについて妥当性を検討するために、平成22年に看護系大学、専門学校の小児看護学実習を終えた学生を対象に、質問紙調査を行い、23年度は分析・学会発表を行った。その結果、面接調査から導いたプロセスは、質問紙調査によっても同じ傾向が示唆され、子どもの立場に看護実践を導く指導に活用できると考えられるが、新たな概念の可能性や、質問項目の設定がしにくい概念があったこと等の課題も明らかになった。

(大見サキエ, 高橋由美子, 坪見利香, 宮城島恭子, 石田寿子 (天理医療大学), 佐鹿孝子, 久保恭子, 坂口由紀子 (埼玉医科大学))

#### 14. 低出生体重児の増加および体重増加に及ぼす妊婦の栄養状態に関する縦断的研究

妊婦の栄養摂取状況からみた、妊婦の体重増加と胎児の発育状況を縦断的に調査し、低出生体重児の要因を明らかにすることにより、低出生体重児の出生を予防することを目的とする。本研究では妊娠期間を初期・中期・末期の3期に区分し、各期間の妊婦の食事をデジタルカメラにて撮影、写真から管理栄養士が栄養素別に摂取内容を分析する。さらに妊婦健診時には各時期の妊婦の体重増加と胎児の推定体重等を測定し、妊娠期間中の食事の質と量のバランスの良否と妊婦の体重増加と各期間の胎児の発育状況などを照合しながら縦断的に検証する。

(久保田君枝 田坂満恵 羽持寛子 福岡欣治)

#### 15. 中学生の月経周期と生活に関連した要因

思春期の女性のやせや肥満、喫煙などは健康を脅かす問題であり、月経との関連がある。母性機能として妊娠、出産、子育てのために生活習慣や心身の健康を保つことが重要である。初経のみられた中学生女子を分析した。月経周期が28~35日であるのは約7割であったが、3割は治療を要する。月経周期と睡眠、朝食、ダイエット、友人などの生活について分析を行った。「信頼する友人がいること」は月経周期が順調であることと関連が示唆されたが、良好な睡眠、朝食摂取、ダイエットの成功体験などに有意な関連はみられなかった。治療を要する中学生は今後の性機能が正常に発達するために受診しやすい環境を作る必要があるといえる。また、信頼できる友人の存在と月経周期との関連性はさらに分析を深める必要がある。

(安田孝子、久保田君枝、足立智美、田坂満恵、羽持寛子)

#### 16. 妊婦の姿勢とマイナートラブル・産科異常との関連

妊婦の姿勢とマイナートラブル・産科異常との関連を明らかにするために、2年である平成23年度は成人女性と妊婦の姿勢と筋力測定と質問紙調査を実施した。妊婦への調査は妊娠初期、妊娠後期、産後1ヵ月の3回実施した。調査協力に同意した成人女性37名、妊婦24名の調査を実施した。分析対象者は成人女性33名、妊婦21名である。今後研究成果を発表していく予定である。(足立智美)

#### 17. 母親の養育者としての発達に関する研究—「愛着-養育バランス」尺度の活用—

母親の養育者としての発達過程を明らかにし、個々の発達に応じた支援策を講じることを目的としている。そのため平成21~22年度に尺度開発を行い、その論文の第1報は学会誌に掲載され、第2報は投稿中である。支援策の構築とともに、乳幼児健診での尺度のアセスメントツールとしての有用性を検討し、適切な時期に適切な支援が講じられることを目指している。23年度は産後1か月の母親に3年間の継続調査を開始し、3つの市の6か月児相談、1歳6か月健診で調査を行い尺度の有用性を検討している。途中経過については学会にて発表している。平成23年11月には子育て支援に関する講演会(池川明氏: 幸せな出産・子育て~胎内記憶からみえてくるもの~)を開催した。

(武田江里子、小林康江)